

研究ノート

危機言語研究の現在

——ユネスコアトラスに関するC.モーズリーの論考——

坂本 邦彦

A Study of Languages in Danger:

Moseley's Perspective on the UNESCO Atlas

SAKAMOTO, Kunihiro

Abstract

According to the news letter of the Foundation for Endangered Languages, there are agreement among linguists who have considered the situations that over half of the world's languages are monibund, i.e. effectively being passed on the next generation⁽¹⁾. The United Nations Educational Scientific and Cultural Organization (UNESCO) decided to respond to this situation and recognized it as a task of great urgency. Christopher Moseley is a general editor of the third edition of *UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger*. In the third edition of the Atlas, we can access online for the first time through the UNESCO website, and submit comments and suggestions for amendments and corrections to the more comprehensive data. On the differences between the print and online editions, Moseley addresses the many editorial decisions and challenges. In this paper I introduce Moseley's retrace on the Atlas back to its origins and discuss the process of expanding its coverage.

要 約

本稿は、ユネスコが発行している世界危機言語アトラス第3版の編集長C.モーズリーの論考を通して、危機言語研究の様相を考察していくことが目的である。これまでも、歴史上、いくつもの言語が消滅してきた。世界には、話者がいる言語は6000を超

(1) Crystal, D.2000. Kindle edition. No.34.

えるとされる。しかしながら、そのうちの半数は、世代間継承が途絶え、今世紀中に話者がいなくなり、消滅していくと考えられている。そうした状況に対してユネスコが対応していったのが危機言語アトラスの作成である。ユネスコアトラスの第3版は、従来のプリント版に加え、ユネスコのウェブサイトを通してアトラスのデータに直接アクセスすることができるようになるとともに、利用者は、ユネスコにコメントを送ることができるようになった。危機言語研究は、書かれたデータだけを扱うのではなく、むしろ、文字化されていない情報の中にその言語を考える重要な要素が含まれていることがある。また、実際の話者による視点は、研究者の守備範囲を大きく超える可能性があり、オンライン版の登場を通して、そうした新たな地平が開かれていくことが期待される。

キーワード

ユネスコアトラス (UNESCO Atlas)

危機言語 (languages in danger)、コーパス (corpus)

無形文化遺産 (Intangible Cultural Heritage)

目次

はじめに

1. ユネスコの世界危機言語アトラスの概要

2. C. モーズリーの論考

3. 考察

おわりに

引用文献

言語が死んだときに私たちが失うものは何か。なぜ、言語の死を問題にすることが重要なのか。どのような質問や方法を使えば、差し迫った人間の認識方法の崩壊に最もよく対応できるのか。これらの問いにまともにこたえる唯一の方法は、脆弱な言語の研究を、人間の思考の壮大な物語の中に、また、自分たちの言葉を石や羊皮紙に記すことなくこの世界から静かに去っていったさまざまな民族の忘れられた歴史の中に、正当に位置づけることである。—— ニコラス・エヴァンズ⁽²⁾ ——

はじめに

危機言語 languages in crisis / languages in danger に関する研究が多方面で行われるようになった1990年代、その先駆けとなる論文をマイケル・クラウス Michael Krauss は、*Language* 誌に発表している。その中で、世

界にはいくつの言語が存在するかという議論に関し、次のように語っている⁽³⁾。フューゲリン夫妻 (Charles Fredrick Voegelin and Florence Marie Voeghelin) が1977年に出版した『世界の言語の分類と指標』*Classification and Index of the World's Languages* では、世界の言語は、消滅した言語も含めて4500語としている。ルーレン Ruhlen は、話者がいて実際に使われ

(2) Evans, N. 2010. 大西他訳. P.7.

(3) Krauss, M. 1992. P.5.

ている言語を5000語と推定している。また、グライムス Grimes は、最初は6000語としたが、その後言語と方言の違いを考慮して6500語としている。クラウスは、これらの議論を踏まえ、6000語と推定するのが妥当であるとした。そして、6000語のうち3000語が、次の世紀（21世紀）中に消滅するだろうとしている。さらに、最悪の場合、次の世紀には人間の言語の90%が消滅に向かうのは、十分可能性があることであるとし、言語学者は、この事態にどのように立ち向かっていけばよいのであろうか、と問いかけている。

こうした言語の消滅が議論されるようになった契機は、1992年にケベックで行われた国際言語学会議での宣言採択であった。

「言語が消滅することは、それがいかなる言語であれ、人類にとって取り返しのつかない損失である。ゆえに、文法や辞書、発話記録などの形で言語の記述を行うため、言語関係の組織による事業を奨励し、可能な場合には資金提供することによってこの状況に対応することは、ユネスコの緊急課題である。ここでいう事業には、口承文学や、これまで研究されていない、もしくは適切に文書化されていない危機言語の記録が含まれる。」⁽⁴⁾

ユネスコはこれに応じるために、1993年11月に「危機言語プロジェクト」を立ち上げることになった。

本稿は、ユネスコの『世界危機言語アトラス』のオンライン版の作成を中心的に担ったクリストファー・モーズリー Christopher Moseley の論考を紹介することを通して、危機言語研究に関する今後の可能性について考

察していく。

1. ユネスコの世界危機言語アトラスの概要

クラウスの論文は、さまざまな議論を引き起こしていくこととなった⁽⁵⁾が、国際機関においても、危機言語研究の重要性が認識されていった。ユネスコは、1993年11月の第27回総会において「危機言語プロジェクト」を採択し、その経過報告のなかで「正確な規模はまだ不明だが、世界の多くの地域で言語の消滅が急速に進行しているのは確かであり、言語記述が一層必要になった⁽⁶⁾」と述べている。ユネスコは、具体的な対応として、1996年に『世界危機言語アトラス』を公表していった。2001年には、第2版として約800の危機言語の実態を公表した。そして、2009年には、第3版として新たにオンライン版⁽⁷⁾を作成し、2465の危機言語に関するデータを利用することができるようになった。プリント版は、2010年に発行された。

ユネスコの『世界危機言語アトラス』のオンライン版は、トップページにおいてインタラクティブアトラスとしての意味を述べた後、サーチツールとして次の項目を提供している。「国、地域名 Country or area」「言語名 Language name」「話者数 Number of speakers」「危機の程度 Vitality」「ISO 639-3 code」、以上5項目のうち、一つ以上の項目に入力し検索すると、地図上に当該言語の位置が示される。その位置マークは、言語情報、出典、コメント送信画面に繋がる。2465言語の情報

(4) Crystal, D. 2000. 斎藤他訳. Pi.

(5) 大角翠. 2013. P.120.

(6) Crystal, D. 2000. 斎藤他訳. Pi.

(7) <http://www.UNESCO.org/languages-atlas/> 2016年8月25日アクセス。

を、ユネスコアトラスから得ることができる。

2.C. モーズリーの論考

C. モーズリーは、2012年に、世界口承文芸プロジェクトの論文として『ユネスコ世界危機言語アトラス』に関する論考 *The UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger: Context and Process* ⁽⁸⁾ を発表した。構成は、次のとおりである。「はじめに」「ユネスコアトラスの起源」「最新版：デジタル版とプリント版」「アトラス作成の視点」「危機の程度」「フィードバックと議論」「言語はいつ死ぬか」「言語、方言、変種」「誰がアトラスにコメントするか」「多言語使用と危機」「将来へむけて」。これらに加えて、図表が付されている。全体は、24ページからなり、そのうち8ページが本文に当てられている。以下、見出しごとの要旨を本文から重要ポイントを抽出する形でまとめていく。

はじめに Introduction (p.1)

国連教育科学文化機関（ユネスコ）『世界危機言語アトラス』の第3版から、利用者はユネスコのウェブサイトから直接アクセスすることができるようになった。これにより、データを修正、訂正する必要があるときには、利用者は自分のコメントや意見をユネスコに送信することができるようになり、世界中の立場の弱い言語に向けられた脅威を多面的に捉えていくことができるようになった。

ユネスコアトラスの起源 Origin and genesis of the UNESCO Atlas (p.1)

十分に記録された言語は、最後の話者が亡くなった後でも何らかの形で保存されるであ

ろうが、話し言葉だけで包括的な記録が残されていない多くの言語でも、その状況を地図上に示すことにより、話者集団の地理的把握が可能となる。世界の言語の多様性が保護される必要があり、そのための介入を必要とするという考えは、動植物の種を保護する必要があるという考えよりも新しい。結果として、生物多様性に関する国際的概念が、『世界危機言語アトラス』の概念を育くむこととなった。

ユネスコは、言語の危機をどのように定義しているのだろうか。危機の最も簡潔な定義は、子どもたちがもうその言語を学ばなくなった時、言語が危機に瀕しているということである。だが、より正確に危機を定義するためには、いくつかのファクターを検討しなければならない。

- ・話者の実数
- ・言語の世代間継承
- ・全人口に占める話者の割合
- ・コミュニティーメンバーの言語に対する態度
- ・言語教育とリテラシー用教材の利用可能性
- ・言語が使用される場面の変化
- ・新しい場面とメディアへの反応
- ・文献資料のタイプと質
- ・公的な地位と使用を含む政府、諸機関の言語に対する姿勢と政策

ユネスコアトラスは、生物多様性の破壊に対し世界規模で警告を発するために考えられた「レッドリスト」の考え方からきている。言語学者と人類学者は、自然による破壊と人間の文化による破壊が平行したものであるこ

(8) Christopher Moseley. 2012. *The UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger: Context and Process*. World Oral Literature Project. http://www.UNESCO.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/pdf/WOLP_OP_05_highres.pdf 2016年8月25日アクセス。

とに気づき始めていた。1992年に国際言語学会 CIPL がカナダのケベックで開催され、危機言語委員会が結成され、ユネスコ主催のバリでの会議開催につながった。ユネスコアトラスの前編集者ステファン・ウルム Stephen Wurm は、東京に危機言語のためのクリアリングハウスを創設し、アトラスの先駆けとなる危機言語レッドブックを1994年に出版した。科学と文化の双方に関する組織として、ユネスコが生物多様性同様に文化の多様性の保護を提唱するのは自然の流れであった。1996年と2001年のこのアトラスの最初の2版は、地図を掲載したが、全世界を網羅したものではなかった。これらの初期の版は、小言語に対する脅威が深刻である地域についてのデータを提供することが目的であった。

第1版は、オーストラリア国立大学教授ステファン・ウルムの編集で1996年に出版されたが、危機に瀕していると考えられた600語がリストアップされ、本文53ページと12枚の地図からなっていた。2001年に出版された第2版も、ステファン・ウルムの編集であったが、危機に瀕しているとされた言語数は800語に増え、本文90ページと14枚の地図からなっていた。だが、それは、依然として完全かつ包括的なものではなかった。

第3版では、ユネスコのウェブサイトからアクセスできるデジタルオンライン版とプリント版との二つの形態が初めて登場した。デジタル版は、国際母語デーに合わせて2009年2月にバリで開始された。英語のプリント版は、一年遅れで出版され、続いてスペイン語、フランス語の翻訳版が出版された。二つのアプローチをとることで、インターネットを介してより多くの利用者がアクセスすることができるようになるとともに、修正への対応が容易になった。

最新版： デジタル版とプリント版 The

current edition: digital and print (p.3)

アトラスが扱う言語は、2500語まで拡大したが、これは世界で話されている言語の三分の一以上にあたる。少なくとも数週間に一語の割合で言語が消滅しつつあり、1950年以降およそ230の言語が消滅したが、アトラスでは、こうした最近消滅した言語も含めることにした。

地図作成のプロセスや技術は、2001年版から大きく変わった。以前の地図は、単色の平面輪郭図であり、地域ごとに描かれ、地勢図的な要素はなく、町の表示やランドマークの記載もほとんどなかった。新しい地図は、グーグルの技術に基づいている。

アトラスのオンライン版では、言語の名称、代替名称、国際標準化機構 ISO コードが掲載されている。ISO639-3コード (1997) は、独立した言語とみなされてきた世界の言語に割り当てられた三文字のコードである。このほか話者数、関連した政策と計画、情報源、地理学的座標が示されている。言語系統間の関係性に関しては、オンライン版のアトラスには載せていないが、これは、複雑に階層化されたものであり限られたスペースでは示すことができないためである。

利用者がフィードバックする機会をもつことは重要であり、それによりアトラスの言語に関する情報に変化が生じることもあろう。個々の言語のデータタブで「コメント」を利用できるようになった。

フィードバックコメントは、ユネスコの無形遺産部門（後に危機言語のための独立した部門となる）がコンピュータ上で受け取り、審査後、編集長に送られ、必要に応じて地域研究の専門家と協議し、修正が実際に必要かどうか判断され、修正が行われる場合は、まずデジタル版で行われたのち、プリント版に組み入れることになる。プリント版は、政府

文書局、国連代表部、パリのユネスコから各国へ配布される。

アトラス作成の視点 Arrangement of the Atlas (p.3)

アトラスでは、言語は点で示し多辺形を使っていない。各言語を示す点は、どれも同じ大きさである。また、安定して脅威のない言語は地図上に示していないが、これは言語が話されている実際の地域を示す多辺形の使用を回避するためである。我々は、各言語の最も中心となる場所に基準点を設けるように努めてきた。話者が広い地域に分布していたり、その間に他の言語があれば、複数のポイントを使わなければならないが、このような「マルチポイント」は避けるようにしてきた。話者が遊牧民であれば、慎重を期さなければならない。移動集団に対しては、最小限の代表的ポイントを示していく。

言語の場所を示すポイントは色分けされ、色が危機の程度を示している。「復活された」とか「蘇生された」言語というカテゴリーを加えることにしたが、これは既にデジタル版で実施されている。用語に関しては、編集者の間でも随分と議論があった。「瀕死」や「休眠中」という用語が議論されたが、「瀕死」は前の版の記述で使われた用語であった。しかし、「瀕死」は、「必然的に消滅に向かっている」という意味になろうが、わがチームが作り上げたかった考えではなかった。そして、「休眠中」は、多くの人がその使用を推奨している用語だが、言語が休眠状態からいつ活性化するかを図る正確な方法がない。「復活」は、休眠状態にあった言語に対して使われる用語であり、いわば生きた話者が一人もなしに、こうした状態から復活したのであり、一方、「蘇生」は、減少のプロセスが終わり、逆転に転じたところに使われる。

危機の程度 Degree of endangerment (p.4)

言語の危機は、使用者の世代という点から分類することができる。アトラスでは、直面している危険のレベルに応じて各言語を色分けして分類した。

安全 safe：その言語が全ての世代で話されていれば、安全ということになり、言語の世代間継承は、妨げられていない。そうした言語は、アトラスには含まれず、データベースや出版物にも示されていない。

ほぼ安定している状態 stable yet threatened：言語の世代間継承が途切れることなく続いている。こうした言語はアトラスには載らないが、将来にわたり見ていく必要がある。

要注意の状態 vulnerable：特定のコミュニティにおいて、家庭のなかでは親の言語を第一言語として話している。

明確な危機状態 definitely endangered：言語がもはや母語として習得されず、家庭でも教えられていない。最も若い話者は、親の世代である。

深刻な危機状態 severely endangered：言語が祖父母の世代かそれ以上の世代でだけ話されている。親の世代は依然としてそれを理解することはできるが、子ども世代に受け継がせることはない。

決定的な危機状態 critically endangered：最も若い話者が曾祖父母の世代であり、言語は日常的には使われていない。これらの老人たちは、その言語の一部を記憶しているに過ぎず、コミュニケーションをとる相手はいない。

絶滅 extinct：誰も話さないし覚えてもない。

フィードバックと議論 Feedback and controversy (p.5)

ユネスコは、危機言語基金に、オンライン版の利用者からのフィードバックを記録し、調査分析するように委託した。フィードバックは、オンライン版の開始以来、継続してきた。当初は、コメントが日に数件の割合で届

いたが、今では、週に2件ほどである。利用者からの提言は、次のように分類できる。

- ・ マーカーの位置
- ・ 危機段階の状況
- ・ 人口と話者数
- ・ 言語の分類、すなわち分類上の上下関係、一言語なのか方言なのか
- ・ 文献目録資料の追加、特に新しい学習素材
- ・ 話者との接触や特徴についての個人的な逸話
- ・ 民族という視点からの政策意見（権利擁護のために奮闘する少数者の代表からのものが多い）
- ・ ユネスコの基準に関する一般的な質問

アトラスを改訂する仕事は、2009年2月にオンライン版が発行されるとすぐに始まった。アトラスについての議論の多くは、西ヨーロッパの言語に関するものであった。まず、絶滅と分類したコーニッシュ語とマン語の活動家から異議が寄せられた。さらに批判的なものでは、段階づけは、言語を値踏みし、等級化する切れ味の悪い道具にすぎないというものもあった。第一言語としてのコーニッシュ語の最後の話者は、1777年に亡くなったドリー・ペントレー Dolly Pentreath であると思われるが、わずかながら19世紀まで生きていた話者がいたといううわさがあった。第一言語としてのマン語の最後の話者は、1974年に亡くなった。しかし、これらの言語は、体系的にまとめられてきており、長く、跡をたどれる書かれた歴史があり、復活することができた。これらの言語の保護者が、今日生きて活動をしており、彼らは、話し言葉の伝統を誇りをもって熱心に守り続けている。

こうした初期の批判を受けて、ユネスコは、「蘇生」と「復活」という二つの新しいカテゴリーを設けることにした。

言語はいつ死ぬか When is a language dead? (p.6)

消滅の問題は、簡単なものではない。これまでも、多くの言語が誕生し、消滅していった。もう話者はいないが、十分に文書に記録されているラテン語のような言語は、消滅した言語といえるであろうか。

話されなくなった言語は、消滅したと考えられるが、多くの言語は記述されることがなかったので、消滅は不可逆的なものである。十分な文書とコミュニティ内部に強い動機づけがあれば、消滅した言語を復活させることは可能であろう。現代の話し言葉へと運命的復活を遂げた例として、ヘブライ語があるが、これは、宗規にかなった体系的な言語であり、聖書の伝達手段として尊重され、イスラエルの国語として広がった。コーニッシュ語やマン語も復活したが、もはや母語として子どもたちに教えられていない。アラマイック語、ラテン語、ギリシャ語、チョーサー時代の英語のような昔の書き言葉は、テキストを利用することができる。

アトラスの第3版では、危機に瀕している言語だけでなく、過去半世紀に消滅した言語を含む。言語が消滅するということは、もはや幼児が家庭で覚える最初の言語ではなくなり、母語としてその言語を習得した最後の話者が、ここ50年間に亡くなったことを意味する。このような短かい間で、言語は、問題なく継承されている状態から完全に失われうるのである。

多くのコミュニティでは、復活への努力は、幼児期にその言語を学んだ長老がまだ生きていたときに始まる。蘇った言語の例はたくさんあるが、多くの言語学者は、復活した言語を継続して途絶えることなく話されてきた言語と区別したがる。ラトビアのリボニアン語のように際立った例もある。それは、最

後の話者が2009年に亡くなったと信じられてきたが、101歳の話者が、何十年かの国外生活の後でも依然として流暢に話すことができ、トロントの高齢者住宅で生きていることが発見されたケースである。

言語、方言、変種 Language, dialect and variation (p.6)

議論は、消滅についてだけ起こるのではなく、言語が「要注意の状態」と評されることでも起こる。ドイツ語の変種に南部ドイツからミュンヘン周辺、オーストリアへと続く地域で話されているバーバリアン語がある。利用者からのコメントは、バーバリアン語は独立した言語ではないが危険な状態にあるとするものである。ヨーロッパ地域の編集者の次のテキストを引用してみよう。

ドイツ語は、Thuringian, Upper Saxon, Silesian からなり、Alemannic と Bavarian 同様 Low Saxon, Limburgian-Ripuarian, Moselle Franconian (Luxembourgish を含む), Rhenish Franconian, East Franconian は、地方言語として認識されている。地方言語はいずれも特に危機に瀕しているというわけではなく、それらはすべて、国語とともに区別的二言語併用の状態で話され続けている。

アトラスでは「地方言語」という語を使用し、「変種」とか「方言」という語を使っていない。言語と方言の違いは、複雑で、議論のあるところである。この問題に、「相互理解のパーセント」のようなものだけを基準として適用することは難しい。ドイツのように、国語とともに二言語使用状況があれば、なおさらである。

誰がアトラスにコメントするか Who comments on the Atlas? (p.7)

利用者からのコメントは、世界中から一様に寄せられてきているのではない。圧倒的多数のコメントは、ヨーロッパからであり、ヨ

ーロッパの言語についてである。ごく少数だが、南アジア、東南アジア、南アメリカの言語に関するものがある。北アメリカの現地語についてはほとんどなく、西アフリカと中国についてもほとんどないが、アトラスでは、それらの地域で危機に瀕しているたくさんの言語を記録してきた。この違いは、どのように捉えればいいのであろうか。

これは単に、ヨーロッパ人の編集者が他の編集者よりも、より細かく言語の違いを分ける傾向にあるということなのであろうか。一つの可能性としてはあるだろうが、すべてを説明しているわけではなく、全ての地域の編集者は、同一の基準を守っているのである。こうした違いは、インターネットにアクセスしやすく、英語、フランス語、スペイン語に流暢であり、コンピュータ操作能力がある研究者だけからコメントが来ていることを意味しているのであろうか。私たちは、ヨーロッパの他の主要な言語でもコメントをもらっているが、ヨーロッパ以外の言語によるコメントは皆無である。

コメントが寄せられる比率が異なるということは、危機の全体概念について何かを語っているのであろうか。「危機」は、依然として白人の概念であり、本来多言語である土地ではそれほど重要ではないのかもしれないということであろうか。結論として、アトラスへのフィードバックがさまざまな形をとることは、驚くにあたらない。もう一つの重要なことは、オンラインの利用者は、プリント版に添付されたテキストにアクセスしなかったという点である。プリント版だけでテキストを提供するというのは、ユネスコのポリシーである。現在、デジタル版にテキストを含むようにするための良い方法はない。

多言語使用と危機 Multilingualism and endangerment (p.7)

言語使用という点では、多言語使用が人間の言語活動の一般的状态であって、近年、多言語使用が減少しつつあるとはいえ、グローバリゼーションにより均質化され、根絶されたというわけではない。二言語から一言語への移行は、予測し難いプロセスである。言語の消滅は、生命を維持する水源の消滅のようなものであり、ある世代で、湖や川が小さな池になり、水たまりとなり、後に完全に干上がってしまうようなものである。しかし、このプロセスは、逆転できないものなのであるうか。

バヌアツ、パプア・ニューギニア、カメルーンは、非常にたくさんの言語があるが、特に深刻な危機レベルになっていない。英語、フランス語、スペイン語、ロシア語の単一言語の話者が考えがちだが、小規模言語は、必然的に危機言語であるとするのは間違っている。小規模言語の継続使用を確実なものとするためには、多くの要因が存在している。

- ・ 母語教育
- ・ 家庭外での共通の使用場面
- ・ 地域社会からの支援、少なくとも暖かい寛容と敬意
- ・ メディアでの使用（印刷物、放送、オンライン）
- ・ 一致した正字法

新しく発見された言語についてはどうか。2010年に、現代言語協会 the Living Tongues Institute は、北東インドでコロ語と呼ばれる言語が発見されたと公表した。これは、再分類するほど新しい言語があるということではないが、世界の言語の中で記録されているものがいかに少ないかを示している。また、昨年、サハラ以南のアフリカのユネスコ顧問編集者であるマシアス・ブレジンガー Matthias Brenzinger は、南韓国沿岸沖のジェジュ Jeju 島の言語が、標準韓国語と本質的な

違いがあることを発見した。韓国人言語学者との議論を通してアトラスを修正し、韓半島にジェジュ語を危機言語として記すことになった。韓国語は、言語変種に関しても非常によく記録された言語である。重要な点は、国語に対する相対的な地位であり、ジェジュ語は、何人かの研究者を除けば、韓国内部でも公式に認識されていなかったのであり、いわば、ドイツにおけるバーバリアン語やイタリアにおけるベネチア語のように、地方言語として捉えられてはこなかった。アジアでは、ジェジュ語はそれほど特別な例ではなく、琉球語は、日本語とは異なる言語として考えられるようになったが、だからといって全ての面で危機に瀕しているということではない。

将来へむけて The future (p.8)

ユネスコアトラスは、最新の情報を提供していくことで、世界の危機言語の全体像を示していくことになろう。アトラスのプリント版とオンライン版の両方が継続していくことが重要だが、さらに一つにまとまっていけば、オンライン版利用者が、テキストを読むことができ、編集者の選択の背後にある理由や理論から有益な情報を得ることができる。また、利用者がアトラスを改善するために行動し、批判的関心を抱き続けることが重要であり、さらに、我々は、言語学者として、それを完成させていくということである。オンライン版アトラスは、2012年2月半ばから3月半ばまでの間に、17,000人以上の利用が記録されている。

アトラスが、人間の文化、地理、人口統計の比較研究の基礎として言語学者以外の人によって使われることは喜ばしいことである。レッドリスト作成の引き金となった生物学的衰退と比べるとどうであろうか。自然界と人間の世界における多様性の損失は、際限のないもののように見える。ユネスコ UNESCO

の二つの領域、すなわち、S（科学）とC（文化）の間の詳細な比較が、今、ようやく可能になった。

3. 考察

『エスノログ：世界の言語⁽⁹⁾』（第14版）によると、世界で話されている言語の数は6800強だとされる。それらの言語の規模は、中国語や英語のような大言語から、残る話し手がわずかに一人といった言語に至るまで、大きな開きがある。その96パーセントの言語（約6530言語）の話し手の総数が世界人口のわずか4パーセントにすぎないのにたいし、わずか4パーセントの言語（約270言語）の話し手だけで世界人口の96パーセントを占めている。前者96パーセントの言語は、話者数の限られた極小の言語である。まさしくそのような言語が、生物種の絶滅をしのぐ速度と割合で消滅しつつある、少なくとも消滅の危機にみまわれているのが現実である⁽¹⁰⁾。

言語の危機に関する概念は、生物多様性⁽¹¹⁾に関する国際的概念が出发点となっているが、国連が、生物多様性に関する条約を締結したのが1992年であり、同条約の締結へ向けての議論のプロセスが、世界の言語の多様性の保護という視点を生み出していった。

ユネスコは、文化遺産に対する活動の焦点を、有形遺産から無形遺産へと移してきた。

ユネスコは、2003年に無形文化遺産保護条約⁽¹²⁾を採択したが、危機言語プロジェクトの立ち上げは、それに先行する形で行われた。無形文化遺産保護条約の対象となっているものと、危機言語がなぜ問題になっているかということの間には開きがあるように見えるが、文化の多様性を認め、それを保護していくことがユネスコの役割である点は、共通である。

アトラスの第3版は、従来のプリント版にオンライン版が加わったことが最大の特徴であり、プリント版も版を重ねるごとに掲載言語数が増加してきている。オンライン版の登場により、インターネットを介して世界の危機言語に係る情報をリアルタイムで入手することができるようになった。さらに、ユネスコとアトラスの利用者との間をインターネットで繋ぐことにより、利用者はユネスコにコメントを送信することができるようになった。利用者からのコメント内容の概略は、「フィードバックと議論」の中に示されているが、その中で言語の分類、すなわち、それが一言語なのか方言なのかという議論がある。クリスタルは、「純粋に言語学的見地から見て、ある二つの言語体系が互いに（おおよそ）理解可能であれば、それらは同一言語の方言とみなされる⁽¹³⁾」と述べている。この視点ですべてが整理されるかというと、実際はそうではなく、クリスタルは、さらに、

(9) 最新版は、2016年7月に発行された第19版である。オンライン上で示されている現在話者がいる言語数は、7097言語である。 <https://www.ethnologue.com/> 2016年8月25日アクセス。

(10) 宮岡他編. 2002. pp.11-14.

(11) 生物多様性については生物の多様性に関する条約: Convention on Biological Diversity (CBD) が、文化多様性についてはユネスコが、それぞれグローバルフォーカルポイント（国際的担当部局）となり、2010年に「共同プログラム」を発足させた。 http://oui.unu.edu/contents/images/bio/Flyer_JP-BiCuD.pdf 2016年8月25日アクセス。

(12) 日本は、2004年に締結、2006年に発効している。2016年6月現在で、日本の無形文化遺産登録は22件、世界全体では、336件である。 http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/mukei_bunkaisan/pdf/about_bunkaisan.pdf 2016年8月25日アクセス。

「純粋な言語学的考察より社会政治的基準が『優先』されてしまう場合もあり、相互に理解可能でありながら別々の言葉とされている言語体系に出会うことも少なくない⁽¹⁴⁾」とする。その例として、次の2例をあげている。「よく知られている例としては、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語がある。これらは、それぞれの言語共同体の構成員がかなりの程度お互いに理解可能であるという事実にもかかわらず、別々の言語として考えられている。もっと最近の例では、セルビア・クロアチア語がある。以前は旧ユーゴスラビア内で一連の変種を総括する言語名として広く用いられていたが、1990年代の内戦を経て、いまではほとんどセルビア語、クロアチア語、ボスニア語という名称に取って代わられている。1990年には当該地域で単一の言語が話されていたのだが、今ではその言語が三つになっている。言語学上の特質はまったくといっていいほど変化していないが、社会政治的状況が後戻りがきかないほどに変化してしまったのだ。」⁽¹⁵⁾

ユネスコは、言語と方言の関係をどのように扱っているのだろうか。アトラスでは、「変種 variety」とか「方言 dialect」という語を使っていない。「地方言語 regional languages」という語を使うことがあるが、これは、一つの「言語 language」として位置づけられている。ユネスコは、国際機関である

ことから、社会政治的基準を言語の分類に持ち込む事を回避していると考えられる。

言語の危機状態は、どのように整理されるであろうか。「世界中の言語状態が多様であること、また適当な変数の組み合わせを解釈できるような理論的なモデルがないことを考えると、危機のレベルを比較するのは非常に難しい⁽¹⁶⁾」。しかし、危機の程度を何らかの方法で示すことは、危機言語のおかれている状況を理解する上で意味を持つ。これまでも、さまざまな議論⁽¹⁷⁾がされてきたが、確立された分類法は見られなかった。そうしたなかで、アトラスでは、世代間継承が途切れていないかどうか、親の言語を第一言語として話しているかどうか、母語として習得されているかどうか、話されている世代が祖父母の世代か、あるいは、曾祖父母の世代か、もはや話者がいないかどうかという視点をもとに分類をおこなっている。これは、言語を分類する指標として言語間を統一した基準で把握することを可能にしている。危機の程度に関して、アトラスは、「安全 safe」「ほぼ安定している状態 stable yet threatened」「要注意の状態 vulnerable」「明確な危機状態 definitely endangered」「深刻な危機状態 severely endangered」「決定的な危機状態 critically endangered」「絶滅 extinct」に分類している。そして、直面している危機のレベルに応じて色分けしている。また、「瀕死 moribund」「休

(13) Crystal, D. 2000. 斎藤他訳. p.13. クリスタルの考え方は、その定義に従う研究者が多いとされるチャンバーとトラッドギルの定義と重なる (Chamber, J.K. and P. Trudgill. 1980.)。すなわち、「ある二つの言語がお互いに、だいたいにおいて理解可能であれば、この二つは同一言語のバリエーション、つまり方言と見なされ、そうでなければ言語とみなされる」。(木部. 2011. pp.5-6.)

(14) Crystal, D. 2000. 斎藤他訳. p.14.

(15) Ibid. p.14.

(16) Ibid. p.28.

(17) 例えば、ウルム Wurm, S. は、5段階に分けている。「危機に瀕する可能性がある言語」「危機に瀕している言語」「危機状態が深刻な言語」「瀕死の言語」「絶滅した言語」である。Ibid. pp.30-31.

眠中 dormant」「復活 revived」「蘇生 revitalized」などの用語が使われている。

こうした「危機の程度」で示された分類は、正確に危機を定義するためのファクターとして「ユネスコアトラスの起源」であげられている9つの項目に対応させて分析することが必要である。これに関しては、ユネスコ危機言語臨時特別班が「言語の生命力と危機」において、ファクターごとに危機レベルに対応した言語の生命力の評価基準を示している⁽¹⁸⁾。ユネスコアトラスは、危機言語の全体像を把握する上での重要な情報を提供してくれる。その一方で、話者が少数であることが必ずしも危機につながっていない例⁽¹⁹⁾もあり、個別言語の特性を言語が置かれている状況に即して分析していく必要がある。

おわりに

人間の文化に関する研究において研究対象とする民族の言語を理解することは、彼らの文化社会の理解にとって重要である。現在、世界には6000～7000あまりの言語があるとされるが、そうしたなかで、発話の記録、地名、歴史的文献など、何らかのコーパスとして形になっているものは60%ほどである⁽²⁰⁾といわれる。言語のコーパスの中で、語彙や文法は第一義的な重要性を持つが、あわせて、その言語を使う人々の世界観が反映されているような発話の記録は、文化としての言語を捉える上で大きな意味を持つ。言語データの収集にとどまらず、彼らの思考体系を反映させた記録方法の中に、言語を記録する意味があると考えられる。

ユネスコの『消滅の危機にある世界の言語アトラス』（Wurm, S.A. (ed.). 1996 and 2001.）によると、21世紀を通してその存在が確実である安泰言語と分類される言語は、1割にも満たない。現在地球上に話者が存在している言語の多くが、近い将来世代間継承が途切れ、その結果存続の危機に直面したり、実際に消滅へと向かうことが予見されている。少数民族の言語を人類共通の知的財産として記録するとともに、その成果を現地社会に還元することは、学術的な意義とともに人間の文化に対する研究姿勢の根本にかかわることである。

文化庁は、「消滅の危機にある方言・言語」に関し、ユネスコの発表を受けて、国内の8言語・方言に関して、文化庁委託事業を行ってきた⁽²¹⁾。ユネスコは、世界で2500に上る言語が消滅の危機にあると指摘しており、日本国内では、8言語・方言がその中に含まれている。ユネスコにより、消滅の危機にあると認定されたものは、次のとおりである。【極めて深刻】：アイヌ語、【重大な危機】：八重山語（八重山方言）、与那国語（与那国方言）、【危険】：八丈語（八丈方言）、奄美語（奄美方言）、国頭語（国頭方言）、沖縄語（沖縄方言）、宮古語（宮古方言）。ユネスコは、前述の通り「方言」を用語として使用していないが、これらの言語の日本の言語学界の認識とユネスコの分類法は、必ずしも一致していない。

「言語の危機」は、いわゆる安泰な大言語を母語としているかぎり、あるいは、二言語併用社会とは異なる言語環境で暮らしていく限り、実感として認識することが難しい概念となる可能性がある。人間の言語は、多様で

(18) UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. 2003.

(19) Crystal, D. 2000. 斎藤他訳. P.28.

(20) Ibid. p.208.

あることに意味がある。ユネスコアトラスは、多様性の実態をオンラインで示してくれるとともに、多様性の中にある危機レベルの現実を伝えてくれる。危機言語の実態は、ユネスコアトラスやエスノログを通して詳細に知ることができるようになってきた。しかしながら、危機言語それぞれのコーパスを描き出すことは、依然として難しく、議論も熟してはいない。文化にかかわる研究のフィールドワークでの蓄積が、危機言語研究の意味を示していくことになると思う。

引用文献

- Chamber, J.K. and P. Trudgill. 1980. *Dialectology*. Cambridge University Press.
- Crystal, D. 2000. *Language Death*. Cambridge University Press. Kindle edition. 斎藤他訳『消滅する言語』中央公論新社. 2004.
- Evans, Nicholas. 2010. *Dying Words: Endangered Languages and What They Have To Tell Us*. Wiley-Blackwell. 大西他訳『危機言語』京都大学学術出版会. 2013.
- 木部暢子. 2011. 「言語・方言の定義について」『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』国立国語研究所.
- Krauss, Michael. 1992. The world's languages in crisis. *Language*. University of Alaska. Fairbanks. Kindle edition.
- Lewis, M. Paul (eds.). 2009 and 2016. *Ethnologue: Languages of the World*. 16ed. and 19ed. SIL International. Dallas.
- 宮岡伯人他編. 2002. 『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店.
- Moseley, Christopher. 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger (Memory of People)*. UNESCO Publishing. Kindle edition.
- 2012. *The UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger: Context and Process*. World Oral Literature Project.
- 大角翠. 2013. 書評「ニコラス・エヴァンズ著. 危機言語：言語の消滅でわれわれは何を失うか」『言語研究』144.
- UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. 2003. *Language Vitality and Endangerment*. Paris.
- Voegelin, Charles Frederick and Florence Marie Voegelin. 1977. *Classification and Index of the World's Languages*. New York: Elsevier.
- Wurm, S.A. (ed.). 1996 and 2001. *Atlas of the World's Languages in Danger of Disappearing*. UNESCO Publishing.
- (21) http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/ 2016年8月25日アクセス。
- ・危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書
(平成23年2月 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所)
 - ・危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取り組みなどの実態に関する調査研究事業 (アイヌ語) 報告書
(平成25年3月 国立大学法人 北海道大学)
 - ・危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取り組みなどの実態に関する調査研究事業 (奄美方言・宮古方言・与那国方言) 報告書
(平成25年3月 国立大学法人 琉球大学)
 - ・危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書
(平成26年3月 国立大学法人 琉球大学 (国際沖縄研究所))
 - ・危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取り組みなどの実態に関する調査研究事業 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書
(平成27年3月 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所)
 - ・アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次 (北海道沙流群平取町) 報告書 1/3、2/3、3/3
(平成27年3月 国立大学法人 千葉大学)

